

漢字統一会に関する一考察

清国と韓国の反応を中心として

劉鮮花

本稿は漢字統一会を対象とし、漢字統一会の成立経緯及びそれに対する関係国清国と韓国の反応を考察しようとするものである。

漢字統一会は一九〇七年四月十二日に華族会館で総会を開き、「日清韓三国の通行の漢字を統一し、教育経済政治と実業等の諸便利を図る」という主旨を含む会則を決議した。一九〇九年に泰東同文局により『同文新字典』が出版された。

この漢字統一会を対象とする研究は、管見の限り多くない。それは、埋橋徳良が指摘しているように、漢字統一会の成立と解散、役員と事業目的など基本的な資料もいまだに不明であ

る^①ことが一因であろう。それら数少ない先行研究では、主に漢字統一会を伊沢修二（一八五一—一九一七）^②の一事業として、漢字統一会の実体に着目した。例えば「東亜共通語」の動機論を主張する竹内好、長志珠絵、石川巧と李尚霖のほかに、安田敏朗は竹内好の議論が一九四〇年代の時代背景を反映した可能性を指摘して「東亜共通語」の動機論に疑いを示した^③。

漢字統一会の発議、成立と辞典の編纂など一連の仕事は伊沢修二を含む多くの日本人学者や名士を中心として進められたので、伊沢修二だけではなく、そのほかに重要な参加者たちの主張なども見る必要がある。例えば重野安繹（一八二七—一九一

○)と市村讚次郎(一八六四—一九四七)ら漢字擁護論者と、大槻文彦(一八四七—一九二八)と物集高見(一八四七—一九二八)ら仮名擁護者が一同に漢字統一会に参加したため、その様々な論者の主張を考察するのが漢字統一会の性格と実績の少なさを明らかにするのに役立つだろう。また、漢字統一会は「日清韓三国」にわたる事業として設定しているため、清国と大韓帝国(韓国)はどのように受けとめているのかを考えることも重要である。李尚霖は清国からの反応も加えて資料を一部補充して論じたが、同会清国部会長に選ばれた張之洞(一八三七—一九〇九)の言説については漢字統一会以前の二八八八年のものを根拠としており、時代的变化を再検討する必要があると思われる。また、韓国の反応について、李尚霖は、同会韓国部会長に選ばれた朴斉純(一八五八—一九一六)は伊藤博文が韓国の統監として強大な権力を持つ人的つながりのゆえに、「必然的に漢字統一会の韓国側会長に任ぜられることになった」と、韓国側の政治的かつ受動的な反応を強調したが、漢字排斥運動を含む韓国国字改良改革運動の最中である時代背景を考慮すると、再考する必要がある。

本稿では漢字統一会の成立と運営に関して、清国と韓国がどのように関与したのかを考察する。この考察を通じて、漢字統一により東アジアの連携と統合を唱える、アジア主義的な事業

に対する日清韓三国における反応の差異とその差異がでる内在的原因を明らかにしたい。

一 漢字統一会とは何か

第一節 漢字統一会の発案

漢字統一会の成立を考えるには、清国提学使^⑤の日本の教育視察から始めなければならない。一九〇六年八月八日、日本の教育を視察するために、湖北省提学使の黄紹箕をはじめとする提学使一行が東京に到着した。一九〇六年九月二五日に、提学使は帝国教育会との意見交換会において、清国の文字(漢字)が難しく、方言が多くて交通不便するので、どんな方法でそれを排除すべきだかという問いを提出した^⑥。翌日午後五時に帝国教育会教育倶楽部で提学使一行をもてなした晩餐会で、団長の黄紹箕はもう一度上記の問いを提起した。これに対して、晩餐会に出席した伊沢修二は率直に意見を述べた。「第二題の文字に付きて一言せん其方法は日、清、韓三国の音を整理し、一辞典を造らばしからんと思ふ。近日私は漢字統一会を造るにより其趣旨書を提学使諸君に差し上げ」る^⑦と。日清韓にわたる漢字統一会ということばが、初めて公式の場で使われた。具体的な方策には言及していないが、同席の人々は三国の漢字を統

一する」という提案に賛成した⁸⁾という。伊沢修二は提学使の質問に刺激を受けて漢字統一会の発案をしたものの、漢字統一会の趣旨書の詳細は彼自身にもまだはつきりしていなかったといえる。

同年十月九日、帝国教育会の辻新次会長は「清国提学使より提出に係る教育問題に関する調査委員を伊沢修二……らの諸氏⁹⁾」とすると決定した。茗溪会¹⁰⁾事務所は提学使等一行を招待し、伊沢は提学使一行に「大清出洋提学使諸公前之意見」という題目で演説した¹¹⁾。この演説で伊沢は、清国国内における文字言語改革の施策と東アジアにおける漢字統一会という二節に分けて論じている¹²⁾。漢字統一会について、「今日之時勢」のもと、「東亜交通」が日々に「親密頻繁」になるため、「三國之情」を連結させる「統一之法」として漢字を統一して「三國之文明」の「開発」を図るため漢字統一会の結成を提案した。それに対して、「賛成本会者、非常之多¹³⁾」、「両国諸志士、又協議組織「漢字統一会」とすることを約束した。このように、漢字統一会は日本と清国の発議により結成されたが、その一方で韓国から「その議に参加する人¹⁴⁾」はいなかった。

第二節 漢字統一会の成立から総会まで

清国提学使が帰国した後、一九〇六年十二月二四日の夜に漢

字統一会の「発企人会」が開かれ、同会の枠組みを定めた。その後何回かの集会を経て、一九〇七年四月十二日に華族会館で開かれた総会には枢密院の長老政治家金子堅太郎（一八五三—一九四二）、海軍軍人肝付兼行（一八五三—一九二二）ほか数十名が参加したという。

会員はほぼ皆出席し、事務及び会計を報告した後、章程規約事項を決議した。清国駐日大使の楊樞も出席したという。伊藤博文を総裁とし、日本部会長は金子堅太郎を、副会長は伊沢修二・実業家村井吉兵衛（一八六四—一九二六）の二人を推選した。清国部会長は張之洞を推選する計画であり、副会長は端方（一八六一—一九一一）・嚴修を選び、楊樞大使は在日清国人の代表として副会長に就任した。韓国部の会長は朴斉純である¹⁵⁾。注意したいのは日本、清国と韓国のメンバーである。まず、日本部においては、政治家の金子堅太郎、海軍軍人の肝付兼行及び実業家村井吉兵衛等の参加者から見ると、これは同会の権威を示そうとする意図が見える。また、総裁の伊藤博文は当時韓国の統監として韓国の政治に深くかわり、韓国部会長に推選された朴斉純は韓国内務大臣を務め、一九一〇年の「韓国併合ニ関スル条約」に署名する人物である。清国側の人物では、張之洞は清末の権力と権威を持つ政治家であり、最高の教育機関である学部にも協力している。端方は清政府に信頼されてい

王照、伊沢修二官話字音一覧

(音首)

	1	2	3	4	5	6	7	8	9
王照式	才 (攪)	卜 (ト)	才 (木)	才 (夫)	五 (五)	女 (皮)	ム (必)	十 (米)	厂 (粗)
伊沢式	才 (攪)	卜 (ト)	目 (目)	才 (夫)	五 (五)	女 (皮)	ム (必)	十 (米)	厂 (粗)
伊沢注視話	p	ɒ	ɒ	ʒ	ɒ	ɒf	ɒɒf	ɒʒ	ɒʒl
伊沢注英語	p	pb	m	f	w	pi	pbi	mi	tsu
漢字ピン音	pu	bu	mu	fu	wu	pi	bi	mi	cu

図二 朱鵬 「伊沢修二の漢語研究」(下) 『天理大学学报』 二〇〇一年、七四頁。

「小学之書」(文字言語学の書籍)に所載されていない「清国俗間」に常用されるものを概

ね七八百字を収めた。また「我国各時代に造られた和字」は「小学之書」に所載されていないが常用されるを百字と、韓国の新字を十二と定めて、全部で約六千字を収録した²⁰⁾。「日清韓三国ノ新字俗字及ビ略字」について、「将来彼我共通スペシト認ムルモノハ之ヲ採録」したものである。つまり、新字俗字と略字の共通化と字体の統一を狙っていると思われる。また三ヶ国の「実用文字」の「漢字音」を比較し、「我字音」により「彼字音之大概」を知るために、図一のように各国の音韻を示した。注目したいのは、「清韓両国音」を「精確ニ表出」するため、「一種ノ新音字」により「八十五ノ字母ノ結合ニ依」って表記する²¹⁾。すなわち、伊沢修二著の『視話応用 清国官話韻鏡』(一九〇四年)で表示したように、視話文字で中国語の漢字音の「音首」と「韻尾」を表出し、またそれぞれを伊沢修二が開発した新音字の音首と韻尾に変えて、組み合わせできた新音字で漢字の発音を表記するという。この視話文字、新音字と上述の王照の官話合成字母は、図二のようである。この新音字は「父音又ハ子音ヲ首部ニ含有スル漢字ノ省画ト日本母韻ヲ表スル假字ノ草字又ハ複字トヲ結合」してできた²²⁾。

第三節 同文新字典の編纂と出版

国の「教育経済政治と実業等の」関係を発展させる目的を持っていたことが理解できる。

漢字統一会の主旨にしたがって、『同文新字典』の編纂が始まり、一九〇九年に泰東

同文局から出版された。この『同文新字典』は「漢字統一会の新事業」であり、現在確認できる唯一の実績である。

紙幅の制限のため、本稿は簡単な紹介にとどめる。同字典は、「伊沢修二ノ立案ニ係リ」、「五千字」を「日清韓

二 韓国の反応

第一節 親日政治派の賛成

漢字を統一しようとする漢字統一会の提唱した事業に対して、韓国の反応はどのようなものだったのだろうか。

漢字統一会の成立の段階において、韓国は参加していなかった。だが、『皇城新聞』によれば、一九〇八年六月に韓国の学務大臣李載崑と中樞院顧問朴斉純が漢字統一会韓国支部の発起の趣旨を発表し、「日清韓三国」が「同文同種」であり、ドイツ語がフランス語ができてからラテン語を廃止することはなかったということから、西欧のラテン語と同じような位置に置かれる漢文の存続を擁護した²³⁾。同年九月七日に漢字統一会は韓国の社会の名士らを誘って中橋義塾内で会合を開き²⁴⁾、学務大臣李載崑を韓国支部の会長として選出した²⁵⁾。同年十二月五日に漢字統一会の会談が観鎮学校内で開かれ、同会の事務整理にかかわる進展と方法を協議した²⁶⁾。翌年の十二月十二日に、漢字統一会韓国支部は伊藤博文の追悼会を開き、会長の李載崑らも出席した²⁷⁾。同支部には韓国の統監として強大な権力を持つ伊藤博文の影響が見え、漢字統一会と韓国統監との緊密な関係を推測できる。この意味では日本部と清国支部と比べて韓国支部の活動は自らの意志により行動したとは言いがたい。

とはいえ、当時の韓国で行われていた「国文」と漢字との葛藤に関する論争をも考慮すべきであろう²⁸⁾。韓国支部が作成した「漢字統一会趣旨書」²⁹⁾では、漢文は「わが東亜三国人種に共通するもの」で、「わが東亜三国に通用」し、漢字漢文が最初に漢(漢族)により使われ始めたので漢族の名称がそのまま今まで使われてきただけだと指摘し、漢文と中国と切り離して、漢字使用が他人のものを複写するだけで自主性を持っていないという批判に反論した。また、韓国「国文」が東アジア三国に共通するものではないのに対して、漢文は「東亜三国に通用する」ので、漢文を媒介として「西欧各種の書籍」が「東亜三国」で共有できるというメリットを強調した。上述の文からみると、親日政治家の賛成は韓国の統監伊藤博文からの影響を受けて政治的なイメージが強いが、韓国内で当時漢字廃止を唱えるハングル専用派を批判する一面もあるだろう。

第二節 大東学会

この「漢字統一会趣旨書」を掲載した『大東学会月報』を刊行した大東学会は、一九〇七年二月に組織された儒教系の団体である。会長である申箕善(一八五一—一九〇九)は一八九六年から学務大臣に任命された人物である。三ツ井崇の考察³⁰⁾によれば、申箕善は学務大臣を担当する時期に、一八九四年に

「公式文」において「国文を主位とする」という改革に対して、「国漢併用之文」が「古之学」と融合できないとの理由で反対の意見を出した。だが、愛国啓蒙運動の流れが高まる朝鮮語の「国文」の価値に反対するために、大東学会に集結して「儒学を体」、「新学を用」とすることを唱える声もあった。このような背景において、大東学会は漢字統一を唱える漢字統一会への支持を表明した。この月報の第五号（一九〇八年六月）は「漢字統一会趣旨書」と「日本人設立宗旨一則」を掲載した。そこでは、「漢文」は「古代に生まれたが漢で生まれたのではなく、「漢文二字」が「大体俗の称に従う」ので、「亜文」（東亜の文）という言い方が最も適切であると指摘した³¹。そのうえで漢字と中華秩序を切り離し、「亜文」の東洋三国における普遍性とそれぞれの平等性を強調してそこにおける韓国の主体性を求めた。

また漢文を「日本人支那人と筆談する」時に「通情」するものと考え、一方で、東アジア三国の交通でも韓国「国文」の無力さを指摘し、漢文を廃止すべきではないと論じた。さらに、「日本が何事もますますよく」なるわけは「自分の言葉を自重し」て「カタカナか平仮名で自分を孤立することができない」というのを知るうえで、「わが国と支那との同文」を利用して「漢字統一会」を結成することは、「実は将来性ある」ことだと

評論した³²。この学会は漢字統一会への賛意を通じて、自国の儒学の復興と日本経由の新学を受容のため、自国の漢字廃止不可を強調することに主眼があったものと思われる。

第三節 韓国国学士兪吉濬

兪吉濬（ユ・ギルチュン、一八五六―一九一四）は『同文新字典』の韓国の字音の校正に参加したが、漢字統一会の趣旨をどの程度共有していたかは確定しがたい。兪吉濬は開化派として、韓国の近代思想の啓蒙に大いに貢献し、特に一八九四年に刊行された『西遊見聞』は漢字ハングル併用で書かれ、画期的な意義を持った³³といわれる。岡克彦の研究によれば、兪吉濬は「中華思想」を相対化させつつ、韓国の国家的自我を引き出すことを通じて「開化」を実現しようとしたという³⁴。その対清意識を表すのはハングルと漢字併用体の使用だと月脚達彦は指摘した³⁵。また月脚達彦は、ハングル使用が実用上の理由とともに、清に対する自尊を強調し、朝鮮の文化的独自性を主張する意味が込められているという³⁶。その後、兪吉濬の『大韓文典自序』（一九〇九年）では、「大韓同胞」が固有の言語と特有の文字を持ち、その思想と意志が音声により記録されて、すでに言文一致の精神が四千年あまりの歴史を持っていることを誇った³⁷。さらに、何百年もの「漢文崇拜」により、

「西隣」を「借来」した「客字」が国民の「正音」を駆逐したことを批判した³⁸⁾。この文脈では、「中華思想」を表す漢字を「客字」として相対化し、韓国の主体性を背負う国字・ハンダールに正統的位置を与えたと理解できる。また小学校啓蒙教育に関する意見についても、漢字ハンダール併用文が「複雑難解」であり、「頭脳を乱」し、「知識の増長」を妨害し、「精神」を消耗するなどの弊害を述べて、小学校教育における「国文専主」と「漢文全廃」を論じた³⁹⁾。

だが、兪吉濬は福沢諭吉から深い影響を受け⁴⁰⁾、漢字表記を排除することはなかった。韓国でハンダール専用論や漢字ハンダール併用論の論争が行なわれた際、兪吉濬は漢字を朝鮮語の「一補助物」として、朝鮮語の「附属品」であると指摘し⁴¹⁾、漢字ハンダール併用文を堅持したところから考えると、漢字の存在を認める立場は漢字統一会と同じである。兪吉濬は小学校教育の教科書編纂においてハンダールを専用とするのは「可」であるが、漢字を廃止することはできないと指摘した。それは、「吾人」が漢字を借用するのが長く、漢文に同化するのに慣れ、すでに韓国の「国語」の一部になったからであると論じた⁴²⁾。さらに、英文の中にギリシア語から「輸入同化」したものがあっても英語をギリシア語と称する人がいないと指摘し、漢字を借用する漢字ハンダール併用文が「漢文」ではなく「大韓国語」であると

論じた⁴³⁾。おそらく、それは当時の漢字全廃論者に対する批判であるといえるだろう。

とはいえ、一九〇八年に刊行された『労働夜学読本』では、漢字にハンダールでルビをつけ、漢字の音を示すのではなく、その漢字の意味をハンダールで示している。それは一般労働者への啓蒙を考慮したものであったが、兪吉濬の漢字訓読を実践する例でもある⁴⁴⁾。「近來」に通用している小学校書籍を見て、漢字を主とし、ハンダールを付属とする漢字ハンダール併用の場合、音読すると、生徒たちがその文意を全然理解できず、結局朝鮮語の「国文」でもなく漢文でもなくおかしな書籍になったと指摘した。その弊を「自絶」するために、「錯節語」である漢語を音読ではなく、訓読すべきであると述べた⁴⁵⁾。これは小学校教育のためだけではなく、おそらく漢字とハンダールを併用してできた韓国の「国語」の問題を根絶するためであると推測できる。その意味でいうと、兪吉濬は、伊沢修二や漢字統一会が重視する「東亜交通」の「利器」とする「漢字音」に対してあまり積極的ではないと考えられる。だが、韓国保護を容認する兪吉濬は、実業家が集結する漢城府民会（一九〇七）の会長となり、韓日親睦会を組織して実業における韓日の提携を唱えていた⁴⁶⁾。そうした点から見ると、漢字統一会の東アジア三国の経済などの連携に役立つ漢字統一会の趣旨には賛成したので

はないかと思われる。

以上のようなそれぞれの立場で漢字統一会を支持する論者の論説をみた。管見の限り、漢字統一会を明確に反対する論説は見つからなかったが、漢字統一による東アジアの連帯に反対する論者もいただろう。周知のように、保護国時代に韓国の国文改革が規範化に向かい始め、国文改革案も学部へ提出され、「国文研究所」(一九〇七—一九〇九)を学部で設けた。三井崇の研究^⑦によると、日本からの政治的干渉を背景に、日本語が朝鮮の学校教育を通して浸透するのにもない、日本から独立しようとするナショナリズムが形成され、国家と言語の密接な関係を強調してきたという。このことから見ると、元々漢字に反対するハングル専用論者が漢字の統一を利用して東アジアでの連帯を唱える漢字統一会には反対したとしても不思議ではない。

三 中国の反応

韓国では漢字統一会に対して、賛成側の内部でもかなり温度差とそれぞれの考えがあることが分かった。では、漢字統一会の発議に参加した中国側はどのように反応したのだろうか。

第一節 賛成派の立場

提学使団長黄紹箕

前述したように、日本視察提学使一行の団長であった黄紹箕は、伊沢修二の提案に賛成し集会に参加した。また一行が帰国した後、伊沢修二が一九〇七年十月十日から同年十一月二日まで「漢字統一会ノ用務ヲ帯ビ渡清」^⑧するときに、武昌で学事視察をする一方、黄紹箕にも面会した。伊沢の記述によれば、「提学使黄紹箕は学徳並高き君子にして孜々其職に尽され、特に漢字統一会に就きては非常に尽力斡旋し、彼地に発企会を興して支那部の正副会長を選挙することを約された」^⑨という。

この文から、黄紹箕は積極的に漢字統一会を支持し、清で「発企会を興し」て「支那支部の正副会長を選挙する」ことを約束したことが分かる。だが、黄紹箕は伊沢との面会後の二ヶ月後に亡くなっているため、中国支部会長の選挙の話はこれで終了してしまう。

黄紹箕が漢字統一会を支持した理由は、彼の職歴からその一端を探ることができるだろう。編書局監督と訳学館監督などを歴任した黄紹箕は、日本語の書籍を大量に翻訳するとともに日本製漢語が大量に氾濫しつつあった時代背景のなかで、日本からの訳語と和製漢語新字をどのように規範化するのかという問題の解決を迫られていた。訳例のなかに統一すべきものが多く

あるので、学会のような組織がなければ定められないと指摘した⁵⁰。このような背景を持つ黄紹箕は近代科学などを受容する際に清国の学界において氾濫する和製漢語を含む訳語の統一に関心を持ったのであろう。

『教育世界』と王国維

一九〇一年五月に羅振玉（一八六六—一九四〇）が上海で創刊し、一九〇八年一月に停刊した雑誌『教育世界』は漢字統一会にかかわる記事を三つ掲載した。一九〇六年の第一三四期に掲載された「呈中国諸提学使意見書論中国語言及中日韓三国文字之宜統一」（中国の言語及び中日韓三国文字の統一すべきことを論じ、中国提学使に奉る意見書）と「雜纂漢字統一会」。

また一九〇七年の一四四期に掲載された「雜纂統志漢字統一会」は、『同文新字典』編纂の参考文献とされた字典の情報を掲載した⁵¹。この「呈中国諸提学使意見書論中国語言及中日韓三国文字之宜統一」の最後に、「注、統一の原則があつてこそ、一国を組織することができる。統一の条件ははなはだ多いが、言語が極めて重要である。伊沢氏の論は確実である。東亜三国の文字を統一すべしという論は、今日まさに重要なものだ。当局はそれを参考にし採用してほしい。編者識」⁵²と、編集者の意見を述べている箇所がある。つまり、漢字統一会の「東亜三国文字」の「統一」に対して賛成の意を表し、当局に選択的に

採用すべきであると勧めた。それは日本への留学生が大量に増え、多くの日本書が翻訳されるという当時の現状からも捉えられるだろう。

「中国朝野」における「新名詞」（主に日本製漢語）とそれを使う「東瀛文体」（日本的文体）に反対する風潮が強まっていたなかで⁵³、『教育世界』が指摘する「東亜三国文字」は漢字だけでなく、漢字語も含んでいると思われる。「東瀛文体」の逆風に対し、『教育世界』の主要な編集者であった王国維は、一九〇五年の「論新学語之輸入」⁵⁴という文章で、日本の「新学語」を利用すべきだとの意見を表した。「日人之訳語」を使うには「数便」（いくつかの利便）があり、特に意味の違いが無く「両国學術」の「交通之便」に役立つという。この意味では、漢字統一会が三ヶ国の「交通」のために「新学」・「新文明」の漢字・漢語を含む三ヶ国の漢字・漢語の字形・意味を統一しようとした事業は、王国維の意に沿うものであった。

第二節 消極的立場

一九〇七年十月三〇日、伊沢修二は北京で張之洞と面会し、漢字統一会中国支部の会長就任を依頼した。だが張之洞は「国事多端」と「老来記憶に乏し」という理由で依頼を辞して「名誉会長」になると述べた。中国が大量に留学生を派遣し、

書籍の翻訳をする時代背景では、日本は漢字漢語をこのまま使いつづけることを維持することが、中国にたいしては日本を経由して「新学」を受容するのに役立つと考えていた。この意味で、張之洞は伊沢との面会で「其（漢字統一会）の趣旨には賛成なり」と名譽会員たることを承諾し⁵⁵ていることから、日本の「漢学」維持の立場であったと見なすのが当然であった。

一方、「同文」の要素で大量の日本製漢語と日本的文体が中国文字言語と中国文に大きな影響をもたらした。そのために、「東瀛文体」と「新名詞」、特に「新名詞」にかかわる論争が起った。王国維が賛成していた一方で、強く批判する者として張之洞、嚴復、章太炎らの著名な人びとが挙げられる⁵⁶。陸胤は「新名詞、新文体」に抵抗することが「張之洞ら保守的立場の象徴」となった⁵⁷と指摘した。一九〇三年に張之洞も参加した「学務綱要」では、外国語の訳語「名詞」、主に日本製の漢語は中国文辞と合わないものが多く、それをを用いると「国文」を壊してしまおうので、必要でない外国語訳語「名詞」を使わないことを主張している⁵⁸。「新名詞」よりも張之洞が重視したのが日本文体に影響された中国語文体であろう。「新名詞」の濫用によって「国文」と「土風」を脅かすことを防ぐ意図が読み取れる。さらに、同「綱要」で、「外国文法」はもろろん禁止すべきであるが、「中外文法」の混合使用が長期にわたると「中

国文法・字義」が変えられて、「中国の學術風教」もともに「皆滅」びる恐れがあると指摘した。上述の文字・文法の規定は、「梁啓超一派「日本文体」が流行る現状」に対して提出され、「中国人心、風俗、政教的存亡」に関わる重要さを示したと、陸胤は指摘した⁵⁹。この意味では、「同文」の便利さと同時にその危険を考える張之洞は、漢字統一会に対して慎重に対処し、消極的な態度を取ったのは当然であろう。

さらに、伊沢が作った北京官話の新音字も張之洞には受け入れがたかった。面会の時に、伊沢が新音字を張之洞に宣伝したかどうかは不明である。だが、張之洞の清末の表音文字創出という切音字に対する態度から推測できる。清末の中国において切音字の主流をなした王照の「官話合成字母」は古文大家の呉汝綸（一八四〇—一九〇三）、及び学部官僚の嚴修の支持を受けて、清末の各種の切音字案の中で最も注目されたものである。その後直隸總督袁世凱により蒙養学堂（幼稚園）、半日学堂と軍隊で普及し、一九〇五年ごろ字母の識字者は「数万人」になったと倪海曙は述べている⁶⁰。倪海曙の考察によると、袁世凱は「武人」で「中文」の「毒」にそまっていけないという理由で官話合成字母を積極的に支持した一方、張之洞は「大教育家」と自任し「文毒」が深すぎるといふ理由から官話合声字母に違和感を抱いていたと嚴修⁶¹が指摘した⁶²という。嚴修の指摘か

ら、張之洞が官話合声字母から距離を置いていたことは明らかである。そうしたことから、張之洞は袁世凱と端方らが半日学堂で官話合声字母またはその字母の拡大版である勞乃宜⁶⁵の簡字を積極的に普及するのに反して、それらの切音字を普及するための実際的な行動を取らなかった。

「同文」の便利さのほかに、中国文字言語を脅かす「新名詞」、「新文体」及び新音字からの危険も感じた張之洞が、伊沢の依頼に消極的な態度を取るのには当然であろう。

第三節 学術的な批判

管見のかぎり、漢字統一会に明確に批判的な立場だったのは章太炎だけである。章太炎（一八六九—一九三六）は多くの文字学研究の業績を残した古典研究の大家でありながら近代中国の革命家でもある⁶⁶。漢字統一会について、章太炎は一九〇七年十月に「漢字統一会之荒陋」⁶⁷という論文を発表した。張之洞が「同文」の便利さとその危険性をともに考慮して消極的な態度を取ったのと異なり、章太炎は中日両国が異なる言語体系だという近代言語学の常識を持ち、学問的に漢字統一会を論じた。その論文だけでなく、『新世紀』との論争中に出した文章「駁中国用万国新語説」⁶⁸及び『新方言』という本の編纂のときにも、章太炎は依然として漢字統一会を念頭に置いていた。

まず、「漢字統一会之荒陋」の冒頭に、章太炎は「漢字統一会は、日本人により設置され、羅馬字に反対するために、東亜三国と連携しようとする。古い文を尊重し、それを衰えさせないために、考慮深い意志を顕した」と述べた。ここでは、漢字漢文を保護するという方向を評価し、漢字統一会の立場にある程度賛成したと思われる。

だが、章太炎は漢字制限により保護する方法には反対である。章太炎は日本での漢字制限が問題にならないのは、日本には「漢字以外に仮名があるので、漢字不備の場合に仮名文字を足す。故に所用の漢字が二千余字を超えなくても、ことば不足の憂がない。それは自ら仮名という補闕の道具を持つ」⁶⁹からであると指摘した。だが、漢字制限は中国では不可である。もし「漢字統一」のために、「漢字制限」をしたら、中国では「古書を読めなくなるだけでなく、現在の言葉も行き届かないところもある」という⁷⁰。また、章太炎は「現在に言文一致という説があるが、これは実は方言を根絶して、浅薄な儒者の文章に妥協させ、訛りによって簡略化にさせることである。そのため無知な人は、漢字統一会まで作った」⁷¹と書いた。すなわち言文一致の説と漢字統一会が中国の方言を根絶させるのではないかという懸念したのである。言い換えれば、漢字制限を「漢字統一之途」とするならば、中国の漢字の革新が妨害されるだけで

なく、「言文一致」も達成されないということである。

章太炎は漢字制限に反対するだけでなく、伊沢が唱える「常用字」に対しても疑義を出した。「所謂普通」が「何者」を「準」とするのか、「宛平（北京）之語」が「万方準則」になれず、地方の「旧語」も「千百数」あるが、「一己」の「聞」があるかどうかにより「普通者」を決めるのは「不適當」であると、章太炎は詰問した。「中国では死語でも新語と同じように用いることができる」と^①主張した章太炎に対して、漢字統一会が「廢棄語」、いわゆる当時ほとんど使っていない語を廢棄して不明瞭な方法で「普通」字を選ぶのも、章太炎の怒りを買ったと言える。

章太炎は「普通」の字だけでなく、中国語の注音についても批判を行なった。伊沢の新音字について、日本人により創設された漢字統一会が漢人に日本の尠奇（異なったものが混じり合っている）な音で漢文を読ませると述べ、漢字統一会が日本人の語学習得を主な目的としていたことに加え、伊沢修二が同字典が中国人にも利用される意図を念頭に置いていたことを、はっきり意識していたと思われる。だが、日本語の発音は強い濁音が稀であり、中国語文の「魂」を表現できないという^②。したがって、文の「魂」の表出において日本語の韻母をもとに開発した新音字で音韻が微妙な違いを持つ中国語に注音するのが

問題だと、章太炎は考えていた。「字其音」（日本音で注音する）ならば、「焚魂喪失」（目の神気が喪失）し、「精氣菱形」（精氣萎み）になり、「義訓雖在」（意味存在し）ても、「盲動」（無駄に行動する）するしかない」と、章太炎は「正音」の重要性を論じた^③。中国語に日本音で注音するだけでなく、章太炎は北京官話音を基準とすることにも異議を唱えた。章太炎は現在の音韻の一致は宜しいが、異なる方言音も保存すべきであると主張し^④、漢字統一会が方言音を無視することに警戒した。

上述のように、章太炎は漢字統一会が常用字及びその字音を選定するとき、方言として残っている漢字と方言音を排除することに非常に警戒したことが明らかになった。だが、章太炎の批判は日本にとどまる段階の漢字統一会に向けられたものではなく、その事業を中国に拡大しようとする漢字統一会に向けられたものであった。すなわち、漢字統一会が唱える漢字の字数、字体、字音の統一は中国の実情に適しないものとして否定した。また、「日本を主とし、中国と韓国を賓従と」という言葉に表れているように、漢字統一会において日本が指導的な位置にいて、中国と韓国は服従するという不平等な関係を批判しているが、それは一九〇七年に結成したアジア和親会^⑤において唱えたように各国の平等と主体性を求めていると思われる。

四 おわりに

本論文は漢字統一会を対象として、清国と韓国の反応に焦点を当てた。上述の考察を通して、以下のようなことが明らかにになった。

漢字統一会は清の提学使と深い関係を持ち、日清両国共同で提起されたが、漢字統一会の成立過程において韓国は不在であった。だが、漢字統一会が成立された後に、韓国側に漢字統一会にかかわる新聞記事が数多く取り上げられたことから、漢字統一会はある程度知られていたといえる。

本論文の考察を通して、清国と韓国の論者たちは東アジアにおける漢字の共通性を認めたが、漢字を擁護する態度をとるのは、東アジア的な事業と見るより、むしろ自国の国語改革思想

からするものといえるだろう。すなわち、漢字統一会の趣旨に賛同するのは、自国の漢字廃止論者に抵抗する一面があり、また自国の国語における漢字の必要性を自覚した一面もある。また近代国家の建設時期において、「国語」の民族性を守るという意味において、漢字による東アジアの統合を警戒して、漢字統一会への賛同も一定の程度にとどまらせていた面もあろう。それは漢字統一会に対する反応の差異が存在する内在的な原因だと思われる。本稿の大きな問題としては、韓国の反応は面的であるので、今後の課題としてまたその反対側の論説も入れて全体像をみる。今後の課題として、日本、清国と韓国この時期の「国語」改革思想を考察して、漢字統一会が成立する時期の東アジアにおける「国語」思想について明らかにしたい。

註

- (1) 埋橋徳良『日中言語文化交流の先駆者―太宰春台、阪本天山、伊沢修二の華音研究』白帝社 二〇〇〇年、一〇五頁。
- (2) 伊沢修二(一八五一―一九一七)、明治日本の教育者、文部官僚、漢語研究に熱心する。

- (3) 竹内好「伊沢修二のこと」『中国文学』第八三号一九四二年五月。長志珠絵『近代日本と国語ナシヨナリズム』吉川弘文館 二〇〇二年。石川巧「音声の進化論―伊沢修二の言語観とその実践」『国文学論考』三八号二〇〇二年三月、十二―二五頁。

- 李尚霖「伊沢修二の漢字論について——日本の帝國的膨張と「同文」としての東アジア——」(修士論文)二〇〇二年。安田敏朗『帝国日本の言語編制』世織書房一九九七年を参照。
- (4) 李尚霖、前掲論文、六十五頁。
- (5) 提学使は清国で教育行政を携わる地方官僚である。
- (6) 『教育公報』第三二二号。帝国教育会。一九〇六年十月、二—三頁。
- (7) 同上、六一—七頁。
- (8) 「雑纂漢字統一会」『教育世界』第一三四期。一九〇六年、一頁。
- (9) 『教育公報』第三二二号、帝国教育会。一九〇六年十一月、九頁。
- (10) 茗溪会は一八八二年に東京高等師範学校の卒業生により設立され、一九〇〇年に社団法人茗溪会になった。
- (11) 前掲『教育公報』第三二二号、十五頁。
- (12) 同上、十五—十七頁。
- (13) 「雑纂漢字統一会」『教育世界』第一三四期。一九〇六年、一一—二頁。
- (14) 同上、二頁。
- (15) 「漢字統一会」(原文は漢文で、著者が現代日本語に訳した)『太陽』「清国時文欄」第十三巻第六号博文館、一九〇七年五月、九一頁。
- (16) 『清末文字改革文集』文字改革出版社。一九五八年、八三頁。
- (17) 「漢字統一会章程」『台湾教育会雑誌』第六一号。一九〇七年五月。
- (18) 同上、第十八条と第十九条。
- (19) 同上、第二条、第十四条と第二十二條。
- (20) 漢字統一会撰『同文新字典』泰東同文局。一九〇九年、四頁。

- (21) 前掲『同文新字典』、二頁。
- (22) 伊沢修二「視話応用。清国官話韻鏡」楽石社。一九〇四年七月。
- (23) 「漢字統一会」『皇城新聞』一九〇八年六月六日、一面。
- (24) 「漢字統一会」『皇城新聞』一九〇八年九月六日、一面。
- (25) 「新造字釐正」『皇城新聞』一九〇八年九月十三日、二面。
- (26) 「漢字統一会協議」『皇城新聞』一九〇八年十二月六日、二面。
- (27) 「統一会追悼」『大韓毎日申報』一九〇九年十二月十四日、二面。
- (28) 三ツ井崇。李欣潔訳「開化期朝鮮的「国文」与漢字/漢文的糾葛」『東亜観念史集刊』第三期。二〇一二年二月、一一九—一六五頁。この論文では開化期における朝鮮語の「国文」が主体化される歴史、およびその後漢字との葛藤を分析した。
- (29) 「論説(前號續)」『大東学会月報』第五号。一九〇八年六月二五日。
- (30) 三ツ井崇。前掲論文。一五一—一五三頁。
- (31) 前掲文章「論説(前號續)」。
- (32) 藕山居士「社説」『大東学会月報』第一五号。一九〇九年四月二五日。
- (33) 月脚達彦『朝鮮開化思想とナシヨナリズム』東京大学出版会。二〇〇九年。六一頁。
- (34) 岡克彦「韓国」近代思想史における国家的自我と「競争論」の初期的展開——兪吉潯の「対外観」を中心として』『長崎県立大学論集』第三八巻第一号二〇〇四年六月、三十頁。
- (35) 前掲書『朝鮮開化思想とナシヨナリズム』二九頁。
- (36) 同上、二九—三〇。
- (37) 兪吉潯「大韓文典自序」『兪吉潯全書Ⅱ(文法・教育編)』一潮閣。一九七一年。
- (38) 同上「大韓文典自序」。

- (39) 兪吉濬 前掲文章「小学教育に関する意見」、二五八―二五九頁。
- (40) 三ツ井崇 前掲論文 一四六頁。
- (41) 兪吉濬「大韓文典自序」前掲文章 一〇八頁。
- (42) 兪吉濬 前掲文章「小学教育に関する意見」二五八―二五九頁。
- (43) 同上 二五九頁。
- (44) 三ツ井崇 前掲論文 一四九頁。
- (45) 兪吉濬 前掲文章「小学教育に関する意見」同上 二五七、二六〇頁。
- (46) 月脚達彦 前掲書『朝鮮開化思想とナシヨナリズム』一二七―一二九頁。
- (47) 三ツ井崇 前掲論文 一四二―一四三頁。
- (48) 伊沢修二「清国学事視学談(下)」『近代日本のアジア教育認識・資料編』第九卷所収、龍溪書舎、二〇〇二年、四二六―四二七頁。
- (49) 「答張文伯書」(一九〇四年)、『黃紹箕集』(兪天舒輯 政協瑞安市文史資料委員會) 一九九八年、一二二頁。
- (50) 前掲文章「雜纂統志漢字統一會」、三一四頁。
- (51) 前掲文章「呈中国語提学使意見書・論中国語言及中日韓三国文字之宜統一」、七頁。原文は中国語文である。
- (52) 羅志田「清季圍繞万国新語的思想論争」『近代史研究』二〇〇一年第四期、九四頁。
- (53) 王国維「論新學語之輸入」謝維揚・房鑫亮主編『王国維全集』第一卷、浙江教育出版社・広東教育出版社、二〇〇九年、一二六―一三〇頁。
- (54) 伊沢修二談「清国教育現状」『朝日新聞』東京/朝刊、一九〇七年一月二六日、二頁。
- (55) 「漢字統一會と張之洞」『朝日新聞』東京/朝刊、一九〇七年一月三十一日、二頁。
- (56) 黄克武「新名詞之戰・清末嚴復詁語与製漢語的競賽」『中央研究院近代史研究所集刊』第六二期、二〇〇八年二月、一―四二頁。
- (57) 陸胤「从「同文」到「国文」——戊戌前後張之洞系統对日本經驗的迎拒」『史林』二〇一二年六期、一二五頁。
- (58) 「新定学務綱要」『東方雜誌』一年三期、影印本、一〇〇―一〇二頁。
- (59) 陸胤、前掲論文、一二七頁。
- (60) 倪海曙『清末漢語拼音運動編年史』上海人民出版社、一九五九年、八九―一九頁を参照。
- (61) 嚴修(一八六〇―一九二九)は清末文字言語改革において有名な王照の官話合声字母と深い関係を持った有名な教育家である。嚴修撰 武安隆・劉玉敏点注の『嚴修東游日記』(天津人民出版社一九九五年)を参照。
- (62) 倪海曙 前掲『清末漢語拼音運動編年史』、一〇四頁。
- (63) 勞乃宣(一八四三―一九二二)、有名な音韻学研究者である。
- (64) 姜義華『章太炎思想研究』上海人民出版社一九八五年を参照。
- (65) 章太炎「漢字統一會之荒陋」『民報』第一七号一九〇七年十月二五日、五一―五二頁。
- (66) 章太炎「駁中国用万国新語說」『章太炎全集』四所収、上海人民出版社、一九八五年、三三七―三三三頁。
- (67) 章太炎、前掲文章「漢字統一會之荒陋」、五頁。
- (68) 同上、七頁。
- (69) 章太炎「博徵海内方言告白」『民報』第一九号 一九〇八年二月

月、二九頁。

(70) 小林武『章炳麟と明治思潮——もう一つの近代』研文出版、二〇〇六年、五四―五五頁。

(71) 章太炎、前掲文章「漢字統一会之荒陋」、八頁。

(72) 同上、八一―九頁。

(73) 同上、七頁。

(74) 一九〇七年に章太炎は東京で陳独秀ら中国知識人と海外に流亡

するインド知識人たちと連合して成立した会で、「宗教」と「国粹」などの統合によりアジア弱小民族を救うことを宗旨とする。日本の幸徳秋水ら数十人が参加し、さらに朝鮮、ベトナムなどの革命者らも参加したという。詳細は朱務本「アジア和親会的作用、局限及其の他」『中国華中師範大学学報』一九八九年第三期を参照する。

(りゅう せんか／博士後期課程)